

日傘

風は清かったが陽射しは強かった
舗道には自由の影が散らばっていた

日傘の下ひとの女は思いもかけず美しく
僕は想ったものだ、言葉の無力について

力は常に弱さの漂うところへと襲いかかるもの
何故なら
それが自然というものの
そして運命というものの「効率の論理」なのだから

おお、自由よ
御前は常に強大な庇護の下にのみ生きる
ならば何故に御前を
僕達は自由と呼ぶのか！

僕が知らずに足を速めたその時
彼女の右手の指の動きひとつで
日傘はくるりと回った
それは丁度、擦れ違いざまだった

もしかしたらこの時
僕は泣いていたのかもしれなかった

せめて己自身の生命いのちぐらい
自分自身で背負いたいものだ

(1990.6.10)